

III

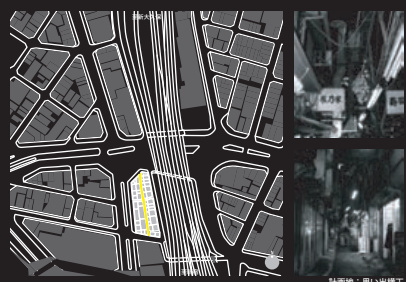


再開発が繰り返され、都市の高層化が進められる新街において、まるで映画にこぼり付いたシミのように残された一画がある。それが計画地である新宿区高野一丁目「あおい出陣」である。この建物は戦後のヤミ市をルーツとする飲食店であり、幅250mm程度という特殊な軸線と共に構築された商業空間には当時の気配が今も残っている。

昔ながらの料理や狭い空間での親密な関係を求める人々によって、「あおい出陣」は60年を経た現在においても賑わいに包まれている。それは一見この建物が建つ前は無縁の地であるかのような印象を覚えさせる程である。しかし建つ人気を担うレストランとは、モノ自体の古さからたらす副産物であるとも捉えることが出来る。そこには避けようのない現実としての移り代わりがあり、それは建物とインフラに静寂なく問いかけているのである。

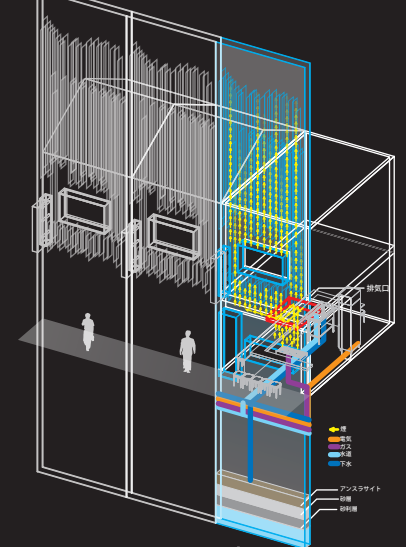
建つ空間性や記憶を継承しながら如何にして継続可能な環境へと変えるのか—そこには従来の開発的変容とは異なる手法が必要となる。この計画は、軸線と建物との境界面に「ファニチャー」「インフラ」そして「煙やニオイの浄化システム」の機能を持つ二枚のガラスハニカムによる「壁」を挿入することを提案する。「壁」はガラスとそれを割られた穴によって構成される。ガラス面は建つ既存立面を模倣しに表出させ、壁に付着した汚れや積った60年間の記憶と現在を接続するフィルターとして働き、矩形の穴はちょうちんや看板などのサイン的要素をその中に収納する機能として作用する。つまり、この「壁」は建つが持つ多様な空間の理、つまりどうしようもない「汚さ」のような部分でさえ許容する装置だといえる。

現在では街を歩んで出陣に行く人々、商家のままのものもあれば、チェーン店が新たに導入したものもある。今後再開発や再び火災起こる可能性も十分に考えられる。建つ空間はその質から根本的に変えられる危機に常にさらされているのである。その様な場合においても、この「壁」に掛けられた小さな穴は建つのかたちとして、そしてその軌跡として建つの記憶を留めたい。これは記憶が継承される壁なのである。

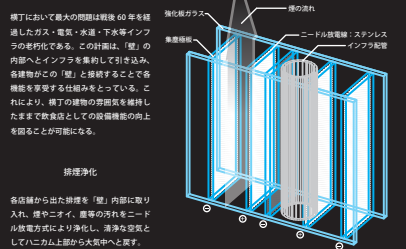


計画地：あおい出陣

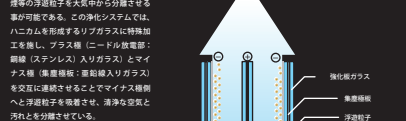
ダイアグラム



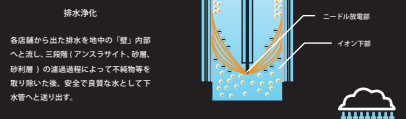
インフラ



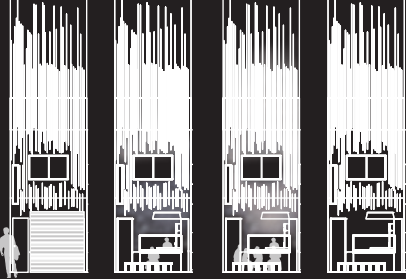
排煙浄化



排水浄化



排煙浄化



排煙が時間や風向きによってファサードを変化させ、様々な表情をつくり、通りを行き交う人々を楽しませる。そして、ファサード内部の付着した汚れは雨によって洗い流す。

